

クレッド通信
2016.10

CREDD通信 05

Center for **R**esearch and **E**ducational **D**evelopment



アクティブ・ラーニング講座

アクティブラーニングを取り入れた
授業デザイン P.2~3



「CREDDの費用支援に基づく
「学科・科主体のFD活動」
P.8



e-kasei 講習会

入門編 - 導入に向けて
応用編 - レクチャノート P.9



東京家政大学 FD フォーラム

授業時間外の学修をどう考えるか?
P.4~7



私の授業論
反転授業と授業改善

P.10



お知らせ
東京家政大学ラーニング commons の
今、これから
P.11



お知らせ
学修・教育開発センター
主催イベントについてのご報告
P.12



第2回

アクティブ・ラーニング講座

—— アクティブラーニングを取り入れた授業デザイン

2016年5月21日東京家政大学ラーニングコモンズにて、第2回アクティブ・ラーニング講座「アクティブラーニングを取り入れた授業デザイン」を行いました。本レクチャーノートではその際にお伝えした内容についてご紹介いたします。

アクティブラーニング（AL）ではそれ自体を導入するのが重要なのではなく、最終的に学生に何を学んでもらうかが重要になります。そこで、ALを導入する上で授業デザインが必要になります。また、良い授業デザインを作ったとしても、学生が興味を持ってくれないと意味がないため、学生のモチベーションも重要になってきます。そこで、本講座ではALの方法を交えながら授業デザイン、モチベーションをお

伝えし、その上で、ALについてご紹介しました。本稿では、紙面の関係上、授業デザインとALについてご紹介いたします。

授業デザインにおいて、まず重要になるのは授業の目的・目標です。学生に結局何を学んでほしいのかを明確にしないと、内容として何を伝えればよいのか、どのようなALの方法を取り入れれば良いのかが明確になりません。そこで、授業の目的・目標を明確にすることが重要になります。そして、その目的・目標を元に授業を設計していきます。そこで、授業の設計に役立つ知見として、授業の構成「導入・展開・まとめ」を紹介しました。導入は学生の興味を引くための部分、展開は授業における目的・目標を達成する部分、つまり学んでほ

しい内容を伝える部分、まとめは授業の振り返りの部分のことを指します。導入は、学生が興味を持つようなトピックを選び、展開へつなげるように作ります。学生の興味をひこうと導入が長くなってしまいがちありますが、授業において重要なのは展開であるため、導入はできるだけ短くします。そして、展開では学生が内容を学んでもらうように設計していきます。まとめでは、授業の振り返りやさらに学ぶための参考文献の提示を行うことで、内容の定着や更なる学びを促進します。このように構成を意識して授業設計することで、学習目標が達成される授業をつくることができます。

次にALについてご紹介いたします。ALの概念は様々ありますが、一般的に共通し





ているのは、ALとは学生が受動的ではなく、能動的に学ぶことである点です。また、ALを効果的に導入するとテストの結果が大幅に高まるという研究[1]もあり、ALはより良い授業づくりにおいて重要な概念となっています。

ここで、ALという、活動させれば良いというように思われやすいですが、ただ学生に活動してもらえば良いというわけではありません。最終的に重要なのは、結局学生に何を学んでもらいたいかということであり、活動を取り入れることは目的ではなく手段でしかないことを意識する必要があります。そこで、授業の目的・目標を明確にして、それを実現するためにALの方法を用いるという授業の目的・目標とALの関係性を意識することが重要です。

そのような関係性を理解したとしても、ALの方法を知らなければ実際に導入することは難しいです。そこで、本講座ではALの方法として、問いかけ、Think Pair Share、ピアインストラクションについてご紹介しました。ここでは、特におすすめの方法である Think Pair Share についてご紹介します。この方法では、教員がまず

問いかけをして、学生がその問いかけに対する回答を一人で考えます。そして、その後、ペアでその回答について共有する方法です。このような方法を用いることによって、学生全員が考え、その考えを他者と共有する機会を提供することができます。教室全体に対して、問いかけても答えてくれる学生は少ないです。しかし、この方法を使うと、ペアでシェアする必要があるため、全員が考えて、相手に自分の考えを伝えます。そして、その後、個人に対して「どのようなことを話しましたか?」と聞けば、全体に対して話し合ったことを伝えてくれるため、誰も問いかけに対して答えないという状況を生まないようにできます。このような方法を、活動自体が目的化することのないように気をつけながら、授業目標に合う形で導入すると学習を促すことができます。

上記に代表される内容を講座ではお伝えしました。そして、講座後の質疑応答では様々な質問ができました。ここでは、代表例として「大人数講義においてALは導入できるのか?」という質問に対する回答を記載します。この質問に対する回答として

は Yes です。ALの効果を示した研究[1]では、250名ほどの学生を対象に教員が行った授業を対象としていますし、実際、Think Pair Share はペアを作ることができれば良いため、どのような人数であっても適用可能な方法です。そのように人数に関係なくALは導入できるため、興味がある方は是非、学んでほしい内容に直結した問いかけや Think Pair Share を試行的でも良いので取り入れてみてください。

これらの情報をもとに皆様のより良い授業づくりに貢献できれば幸いです。お読みいただきありがとうございます。

[1] Deslauriers, Louis, Ellen Schelew, and Carl Wieman. "Improved learning in a large-enrollment physics class." science 332.6031 (2011) : 862-864.

吉田 壘(よしだ りい)

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構 AL 部門特任助教。
東京大学工学部卒業、同大学新領域創成科学研究科修士課程・博士課程修了。博士(科学)。同大学大学院総合教育研究センター特任研究員を経て、2015年10月より現職。学内外における教育改善を促進する活動・研究に従事。



東京家政大学FDフォーラム

平成28年2月24日(水) 13:00～14:50 / 120-3C講義室(120周年記念館3階) / 参加者:教職員66名

授業時間外の学修をどう考えるか？

2016年2月24日(水)に、学修・教育開発センター(以下CRED)主催で「平成27年度 東京家政大学FDフォーラム」が開催された。今回のテーマは、「授業時間外の学修をどう考えるか?」として、二部構成で実施された。前半に、IR(Institutional Research)部門からの内部向け報告として、CRED 宮 東城氏が各種アンケート調査の集計結果から浮き彫りになった本学学生の学修実態について報告した。後半は、受講学生が予習または復習に当てる時間が長いという回答があった上位授業をCREDで選出し、その担当教員3名がそれぞれ独自の授業スタイルを紹介した。

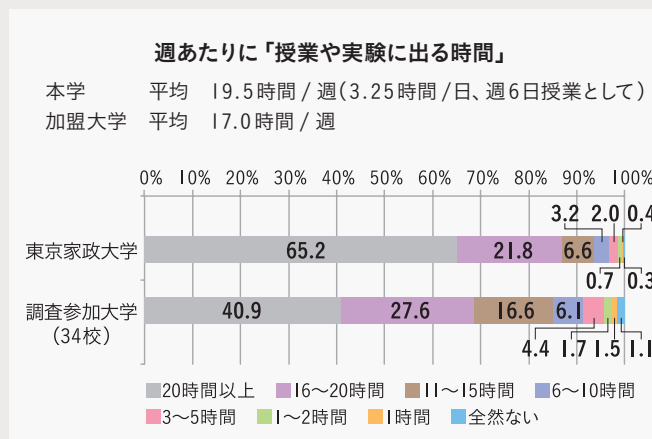


IRに関する定義は大学により異なるが、Association for Institutional Research(アメリカIR全国協会)によれば、「組織としての大学の理解、戦略、運営の改善につながる研究」としている。大学の現状には、大学教育・研究環境、学生の学修環境や生活環境、のほかに大学の経営・運営状況なども含まれる。今回CREDのIR部門からは、本学学生の学修・生活環境を把握するために実施した「一年生調査(2015年11月実施)」、「大学生生活達成度アンケート(1～4年生、11月実施)」、「授業アンケート(前期7月、後期12月実施)」、「GPA」の調査結果について報告があった。

そのうち「一年生調査」は、本学を含め全国の国公私立47大学(2016年8月2日現在)が加盟している「大学IRコンソーシアム」が企画する共通アンケート調査で、昨年11月から本学での実施を

はじめている。そのため本学の結果を会員校全体と相互比較しながら、本学の現状や特色を抽出し自己点検・評価することができるメリットがある。

2015年(平成27年度)入学の1年生を対象に質問した項目のうち、特に「週あたりに授業や実験に出る時間」の回答、「授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする」と「授業時間以外に、授業に関連しない勉強をする」に関する回答を中心に注目すべき集計結果を以下に示す。



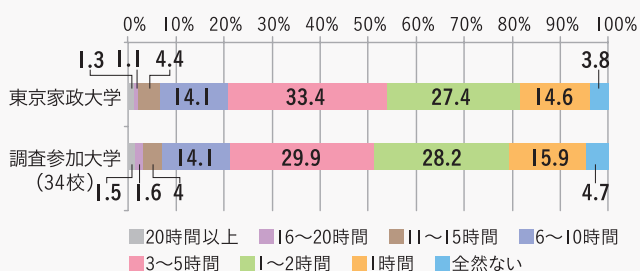
本学の週あたりの授業時間数は、加盟大学の平均時間にくらべると2.5時間多い状況であった。当日参加した教職員を対象に、クリッカーを活用したアンケートを実施したところ、学生の授業時間数は「11～15時間/週」の回答が最も多かった(35%)。このこと



は、教職員の認識と学生の実態に開きがあることを示している。この点は以前より学内で指摘されており、本学学生が授業を必要以上にやりすぎているのかどうかについて詳細な検証が必要である。

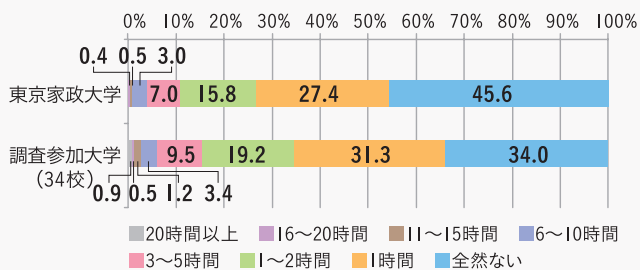
週あたりに「授業時間以外に、課題・準備学習や復習をする時間」

本学 平均 4.4時間 / 週 (0.63時間 / 日)
 ※ただし学科間で幅があり、「2時間以下/週」の回答率は25~66%
 加盟大学 平均 4.3時間 / 週 (0.61時間 / 日)



週あたりに「授業時間以外に、授業に関係ない勉強をする時間」

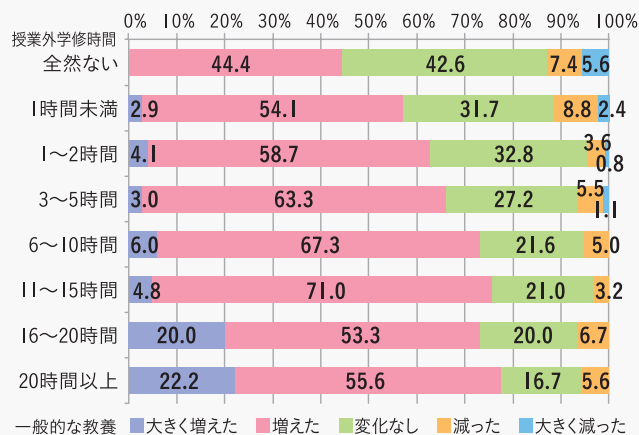
本学 平均 1.2時間 / 週 (0.17時間 / 日)
 ※ただし学科間で幅があり、「まったくしない」の回答率は33~58%
 加盟大学 平均 1.7時間 / 週 (0.24時間 / 日)



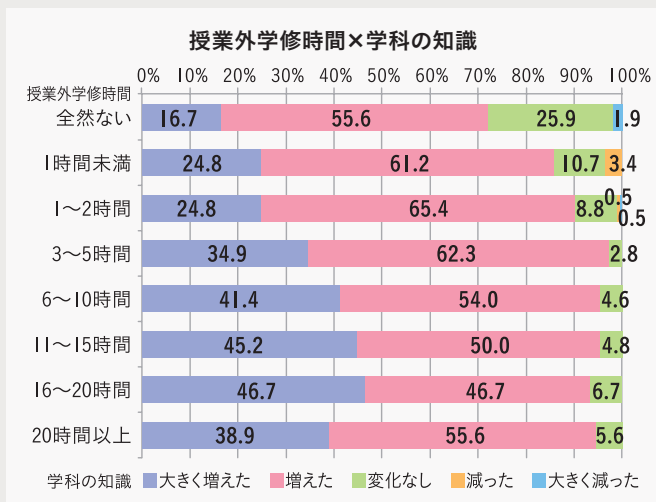
次に本学1年生が授業時間以外で学修のために当てる時間は、4.4時間 / 週という結果であった。この時間数は、加盟大学の平均時間(4.3時間 / 週)とほぼ同じという結果なので、日本の一般的な大学1年生の学修実態なのかもしれない。週末にまとめて学修しているのか詳細は把握できていないが、単純に1日あたりで考えるならば40分も学修していない状況となり、これで学生は本学の授業に対応できているのか疑問を感じる結果となった。また、週あたりの授業数から教職員が望む学修時間数(11~15時間 / 週)と大きく離れている点においても、今後の本学での取り組みを転換する必要があると考える。

いっぽうで、授業外学修時間が「全然ない」から「11~15時間 / 週」に増えるに従い、「一般的な教養」が増えたと感じる割合が、44%から76%に増加している。

授業外学修時間×一般的な教養

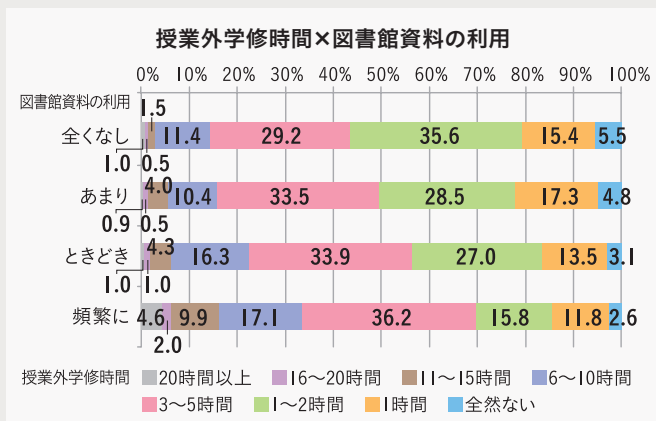


同様に、授業外学修時間が「全然ない」から「16～20時間/週」に増えるに従い、「専門分野や学科の知識」が“大きく”増えたと感じる割合が、17%から46%に増加している。

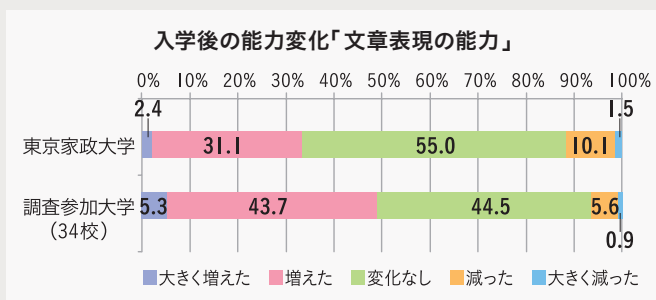


上記の結果は、授業時間数から教職員が望む授業外学修時間が、「11～15時間/週」は必要であることと一致する。

そして、図書館資料の利用頻度が高くなりに従い、11～20時間以上/週の授業外学習をする割合が3%から16%にまで約5倍に増えることから、学内での図書館の利用率を上げる魅力的な取り組みも必須である。



入学後に「文章表現の能力」が増えたと感じる学生の割合は、加盟大学の49%に比べて本学は33%と低い、という特徴となった。全学で「書く技術」を学ぶ総合科目があってもいいのではないだろうか？



ただし、一点だけ注意しなければならない調査結果として、本学のGPAと授業時間外学修の時間との間にまったく関係性が得られなかったことである。これは、時間外学修を必要としなくても、“それなりの成績評価”を得られていることを示している。この要因についての要因はGPAの計算方法も含めて今後注意して検証しなければならない。

第二部は、パネルディスカッション形式で、「授業時間外の学修へ誘う工夫」について意見交流をした。CREDが選出したパネリストは、佐藤 邦子先生(子ども支援学科)、谷田 恵司先生(英語コミュニケーション学科)、小林 理恵先生(栄養学科)の3名であった。パネリストの先生方が担当されている授業は、いずれも授業アンケートの調査結果で「授業の予習や復習をよくした」という受講生の回答数が多かった上位のものである。それぞれの先生方が授業スタイルとして工夫されている点について、パワーポイントを用いて紹介してもらい、参加者と一緒に共有した。これは学生を授業時間外の学修へ引き込むことをテーマとした「公開授業」としての側面もあり、非常に有意義な企画であったと感じる。以下に3名のパネリストが紹介した工夫をまとめた。



子ども支援学科
佐藤邦子先生
1、2年生対象
「子どもの音楽I～IV(実習)」

- ・ 具体的な学修課題(到達目標)の提示(復習と予習)
- ・ 受講生ごとのレベルに合わせて与える課題を変える(復習と予習)
- ・ 課題への取り組みを確認する試験の結果と評価をすぐに伝える(復習)
- ・ 練習(ピアノ課題)時間の記録



英語コミュニケーション学科
谷田恵司先生
「英語IB(共通教育:演習)」
「文学と人間(共通教育:講義)」

- ・ 講読スタイルなので「予習」は必須
- ・ 毎回学生はあてられる(「予習」するしかない)
- ・ 「復習」型の小テスト実施(5～10分)



- ・小テスト問題を期末テストで再度問うことを事前に宣言する（復習）
- ・毎回、受講生がスピーチや発表を担当する（「予習」するしかない）



栄養学科
小林理恵 先生
「基礎調理実習」

- ・具体的な到達目標を提示する
- ・具体的な授業時間外学修の課題を提示する（予習）
- ・調理実習前に必ず、作業計画の立案と献立のイメージ形成（予習）
- ・学生が事前に作成した実習計画表の評価と、返却・確認（復習と予習）
- ・授業（実習）は、予習した内容の再確認の場
- ・取り組んだ学修内容を記録する「実習ノート」の作成（復習）
- ・課題の難易度や量は、学生の負担を考慮する

学生を授業時間外学修に誘うための工夫として、3名のパネリストが共通に挙げたものは、「具体的な到達目標」の浸透と、適度な難易度と分量の「具体的な課題」、そして取り組んだ「具体的な課題」に対する評価をすぐに学生に返すことであった。特に、学生への評価フィードバックに向けた各パネリストの努力は驚くばかりであった。その結果、学生が、（最初はいやいや？でも）最終的には「楽しんで」課題に取り組むように変化している、という点も共通していた。今回のパネリストは主に実習や演習担当であり、その授業スタイル上、学生は授業時間外に予習・復習をすることが必須と

なる。今後、講義科目のなかで「授業時間外の学修」時間が長いものを次回のパネリストに選出することが求められる。

最後にFDフォーラム参加者からのアンケートのなかで注目すべきものは、「授業時間外の学修」を強要することが目的ではなく、授業内容や教育環境の改善のなかで結果的に「授業時間外の学修」のための時間が増えてこなければ意味がない、という指摘である。アンケート回答のなかには含まれていなかったが、学生の授業時間外の多くが学費・生活費確保のためのアルバイト時間で占められていることも無視できない状況である。学生が授業する週あたりの授業時間の多さと併せて、複合的に戦略を練って学修向上を図る必要があると思う。

そのためにも学生からのアンケート回答を調査・分析をし、内部報告を通して学内で取り組むべき課題や戦略を抽出・実行していくIRはこれまで以上に必須な業務となる。

（文責：大西 淳之）

Report Part 1

大西 淳之
（おおにし じゅんじ）



本学栄養学科教授（生化学研究室）、学修・教育開発センター参事。
北海道大学大学院理学研究科、東京医科歯科大学難治疾患研究所、財団法人国際科学振興財団バイオ研究所を経て、平成22年本学着任 / 研究分野：精神栄養学、健康生成論 / 著書：『レーヴン・ジョンソン生物学上・下』（培風館）

CREEDの費用支援に基づく 「学科・科主体のFD活動」

公益財団法人 大学コンソーシアム京都
2015年度 第21回 FD フォーラムに参加して

児童学科・保育科 平山 祐一郎

学修・教育開発センターの参加費、交通・宿泊費の費用支援により、大学コンソーシアム京都主催第21回 FD フォーラムに、平山祐一郎・梁川悦美・石川昌紀の3名が参加しました。2016年3月5日は全員参加のシンポジウム、6日は事前選択の分科会に出席しました。シンポジストは大学教員だけでなく、大学職員やNPOの方も含まれていたため、話題豊富で、様々な刺激を受けました。講堂には707名が着席していましたが、ペアワークやグループワークもあり、参加している実感が十分にありました。

同僚3名で参加したことにより、車中や食事中も、「学生とどう向き合うか」、「これからどんな授業を作って行くべきか」というFDに関する話題がずっと続きました。翌月に新年度を控えた3月ということもあり、そのときに話し合ったことを授業に反映することができました。また、実際に効果を上げることもでき、手前味噌になりますが、このフォーラムへの参加がすぐに成果につながった、と行うことができそうです。

講習会

「ユニバーサルファッションを考える」を開催して

服飾美術学科 鈴木 由子

当学科では、2月9日（火）講習会を開催しました。内容は、福祉技術研究所株式会社の岩波君代氏による講義と、林田美貴子氏と藤原美紀氏の2名による実体験の講話という形式で、出席者は学科の教員（助教・助手含む）27名と大学院生1名でした。

講義の内容は次のとおりです。現代は色々なサイズの服が出揃っている。しかし、その服の対象となっているのは多くが標準体であるため、身体が不自由な人達にとってはそれが身体に馴染まない、着脱がしづらい等の問題がある。これらを改善させるための機能性向上が必要であり、また、これが彼・彼女達にとっての「装う」という、人の心を作り上げていく行為のために大切であることや、その先に社会参加というリハビリテーションが大きな目標としてあるというものでした。

身体の不自由な人達の心まで目を向けて考える等、これまでにない新しい教育の視点・方向性を見出す機会となったのではないのでしょうか。

協同出版セミナー

「小中一貫教育を担う今後の教員養成の在り方」に参加して

児童教育学科 森村 祐子

平成27年6月4日に行われたこのセミナーでは、文部科学審議官による基調講演と教員養成に関わるいくつかの大学の取り組みの様子についてシンポジウムが行われました。

基調講演では、現在の教員免許制度の問題点と、小中一貫教育を見据えた教員免許法の改正に関する施策について説明がなされました。シンポジウムでは、登壇した大学の代表者が自学の取り組み状況や自身の経験談を各々語りましたが、文科省含めどの現場においてもその方針は模索中であることがわかりました。ただ、取得免許種や教員としての質保証についてなど、教員養成大学の今後を考える上での課題点や検討材料のヒントを得ることができたと思います。

児童教育学科はこのようなセミナー参加も含めて、カリキュラム改訂に向けたFDに取り組んでいます。学科独自の研究会を昨年度は8回開催し、今後も継続していく予定です。

効果的な学科内アンケート作成のための 基礎調査

英語コミュニケーション学科 並木 有希

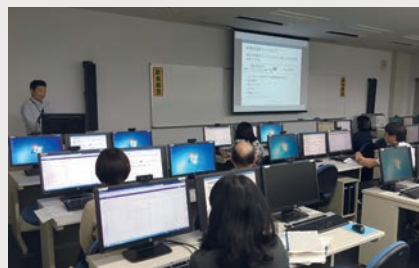
平成27年度は、学科内の問題を早期に発見し、対応を早くするためのアンケート作成に向けて、効果的なループリックを作成するための基礎調査を行いました。第一に、女子大・私大を中心とした全国の大学で、学生対応関係のパンフレット作成例や取り組みの事例を各自調査し、結果を共有しました。第二に、平成28年3月の大学コンソーシアム京都FDフォーラムに参加し、「高校と大学のミスマッチ改善方法の紹介」「適切なゴール設定と主体性を失わない大学経営の在り方」「多様化する職場環境に応じた適切な改革の重要性の示唆」などのセミナーに参加しました。各発表のディスカッションや懇親会で他大学が抱えている問題点、実践と改善方法を共有することで、今後の学科運営にとって有用な知識を得ることができました。調査の成果を活かし、平成28年度にアンケートを完成・実施する予定です。

e-kasei講習会

平成28年6月9日(木) 14:50~16:20 / 15Cコンピュータ室 (15号館)

『e-kasei講習会 入門編』導入に向けて

今年度から、CREDの活動としてe-kaseiの推進が加わり、その活動の1つとしてe-kasei講習会が開催されました。この講習会は、東京家政大学のeラーニングシステムであるe-kaseiを先生方に知っていただき、授業に活用していただくことを目的としています。私が担当した「入門編」では、コースページの作り方や配布資料の提示、出欠サービスなどの基本的な操作を取り上げました。入門編は、e-kaseiをまだお使いでない先生方や、使い始めたばかりの先生方が対象でしたので、まずは興味を持っていただくことを目指しました。参加した先生方からは、e-kaseiを知る良い機会となった、実際に使用してみ



たいといった感想を頂き、目標は達成できたと思います。

e-kaseiには様々な機能がありますが、これは授業補助の道具ですから無理に多くの機能を使う必要はありません。それぞれの授業内容に合わせて、使いやすい・便利と思える機能を使っただけであれば良いと思います。

平成28年6月30日(木) 14:50~16:20 / 15Cコンピュータ室 (15号館)

『e-kasei講習会 応用編』レクチャーノート

これまでのe-kasei活用実績から、本年度e-kasei推進室の仲間に入れて頂いた栄養科の重村です。今回は、本年度実施したe-kasei講習会について報告させていただきます。私は、板橋で1回・狭山で2回開催させて頂きました。実施方法としては、まず私が授業で使っているe-kaseiを、ご参加頂いた先生に【学生の立場】として体験させて頂きました。そして次に先生方が体験したe-kaseiを【教員側】からどのように設定するかを紹介し、実施させて頂きました。講習会では、【出席】・【問題出題】・【問題集計】・【レポート提出】・【評価の閲覧】などの機能を中心に解説しました。私の感触としては、【学生側】の立場で使用して頂く事が、短時間でe-kaseiの機能を知って頂けたように感じました。また、積極的な質問



も多く頂き、推進室も今後の課題を発見ができたので、非常に有意義な講習会となりました。e-kaseiは、授業や先生によって機能の使用方法を変える事が出来ますので、使用される先生方が今後増える事が新しいe-kaseiの活用方法への近道だと考えております。是非ご参加ください！

Report Part2

佐藤 隆弘
(さとう たかひろ)



本学児童学科講師(心理学研究室)、博士(人間科学)、学修・教育開発センター専門委員。
平成23年度本学着任 / 研究分野: 学習心理学、行動分析学 / 著書: 『教育心理学 言語力から見た学び』(共著) 培風館

Report Part3

重村 泰毅
(しげむら やすたか)



本学栄養科講師、農学博士。
担当科目: 食品学各論・食品機能論・食品化学実験Ⅰ・食品化学実験Ⅱ・食品機器分析化学実験・他 / 研究テーマ: コラーゲンペプチドなどを摂取したヒト血液から吸収成分を検索し、その成分の機能性を細胞等で調べている。他には、食品成分をHPLC・LC-MSなどで測定している。



反転授業と授業改善

児童教育学科 阿部 藤子

アクティブ・ラーニング講座第1回「反転授業」

3月26日にCRED主催の講座が開かれました。反転授業の第一人者である埴雅典先生（山梨大学）のご講演でした。これまで、一斉講義で知識注入型だった授業を、必要な知識や練習などを自宅で行い、授業では学生の主体的な授業に変えていくというものです。

どうしたら学生が能動的に取り組めるか、また、授業時間でこそすべきことは何かを考えることが、授業改善の第一歩だと感じました。それには、学生が聞いているだけで済まない授業形態にし、教師や他の学生と対面しているからこそできる話し合いや議論、発表などの活動を盛り込むことで、必然的に、考えることや表現することが保障されるようにすることが必要だと考えました。

組織的に動画や資料の用意をするなど、初めて取り組むには負担が大きいようにも感じますが、簡単に取り組めるソフトも開発されているとのこと。がらっと変えることは大変ですから、少しずつ変えられるところから変えていこうと考えます。

「読書と豊かな人間性」の授業から

私が担当している学校図書館司書教諭の資格を取得するための科目です。主に小学校で司書教諭として、子どもたちに読書の楽しさを伝え指導していくための知識と技能を修得することを目標としています。

開講当初は、子ども読書傾向や読書の発達に関する文献を紹介しつつ、各自の読書経験をふり返り読書の意義や機能について考えることから始めました。しかし、午後の3限の授業で、居眠り続出。これはなんとかしなければと焦りました。

そこでまず、読み聞かせやブックトーク、リテラチャーサークルなど読書指導の方法を知らせ、選書や実際に行うこと、ふり返りの話し合いなど、学生主体の内容に切り替えました。反転という意味では、資料を読んでくる、児童書を手にとって選書する、発表の準備としてメモを書き出してくるなど、簡単ではありませんが家庭学習を必要とするような展開にしてみました。

た。読書指導の勘所を、教えられるのではなく自分たちで気づいていくようにしたのです。班内で全員が発表し合うので、おろそかにはできないという意識が学生には働いたようですし、何より、授業内での発表やその後の議論やふり返りで異なる意見に触れられることに大いに刺激を受け満足が得られたようでした。

大切なことは、少しずつ授業を変えながら、常に教師も授業をふり返り、さらに学生の学修を充実させるために学生の学びに目を向け改善を心がけることでしょう。「少しずつ」をモットーに取り組んでいこうと考えています。



阿部 藤子(あべ ふじこ)

児童教育学科准教授。
お茶の水女子大学附属小学校教諭を経て2015年4月より現職 / 研究分野：国語科教育・授業研究・教師教育 / 主な著書：「国語科授業研究の展開—教師と子どもの協同的授業リフレクション研究」(2016) 共著・東洋館出版社、「〈書く〉で学びを育てる～授業を変える言語活動構造図」(2014) 共著・東洋館出版社、「新提案 教材再研究 循環し発展する教材研究」(2011) 共著・東洋館出版社 ほか。



東京家政大学ラーニングコモنزの今、これから

ラーニングコモنز オープン！

平成27年度末、板橋・狭山両図書館にラーニングコモنزが設置されました。板橋図書館のラーニングコモنزは文部科学省平成27年度私立大学等教育研究活性化設備整備事業によります。

平成28年3月1日、川合貞子学長、新関隆ラーニングコモنز運営プロジェクト準備委員会委員長、新井哲男図書館長によるテープカットにて、Lプラザオープニングセレモニーが行われました。

ラーニングコモنزとは？

そもそもラーニングコモنزとは一体どのような場なのでしょう。



ラーニングコモنزではデジタル化された資料を活用する場として、アメリカの大学図書館にて創出されました。日本では主に学びのスタイルがアクティブ・ラーニングへの変化に対応する場として、設置が進んでいます。

平成25年に文部科学省科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会より「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」が発表されました。そこに学修環境充実に関わる学術情報基盤整備については、主に、i) コンテンツ、ii) 学習空間、iii) 人的支援の3要素から構成されること、学習空間としてラーニングコモنزの整備について図書館に設けるのが適切であることなどが記されています。

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm)

平成27年には国立大学図書館協会から「ラーニング・コモنزの在り方に関する提言」が出されています。

(<http://www.janul.jp/>)

これらの提言に基づき、「東京家政大学ラーニングコモنز」は学修・教育開発センターと図書館にて共同運営という形でスタートしました。

平成28年3月オープン以来、各部署との連携にて、学生生活支援の場としても活用され、教育支援センターの履修登録相談、国際交流センターの留学フェアなどが開催されました。

催しについて

板橋図書館のラーニングコモنزでは学生や教職員に対する新しい学びへの挑戦、新しい学びへの誘いに関する様々な催しが実施されています。

以下は平成28年度の実施状況です。

教職員向け

◆アクティブ・ラーニング講座

学修・教育開発センター主催の継続講座です。

・3月26日 埴雅典先生（山梨大学）

・5月21日 吉田壘先生（東京大学）

学生・教職員向け

◆Lプラザオープン記念講演会

図書館で所蔵する西洋服飾に関する貴重図書^{いざな}を直接閲覧しながらの講演でした。

・5月12日 能澤慧子先生



◆Kasei no Wa

学生も含めた東京家政大学人が研究成果、活動状況などを報告するショートセミナーです。学生、教員、職員を結びつけ、Kasei no Wa = 家政の輪 = 家政の和を目指した催しです。

政の和を目指した催しです。

・6月28日 片田真一先生

・7月6日 森田幸雄先生

・9月28日 阿部藤子先生

・10月19日 新関隆先生

・11月2日 重村泰毅先生

・11月16日 田中恵美子先生

以降、続々と企画していきます。



学生向け

◆English Commons

国際交流センター主催、平成28年度後期より板橋・狭山ともに開催されます。nativeの先生を囲んでのたのしいサロンです。

学生のピアサポートについて

平成28年度板橋図書館では学内インターンシップ生2名を受け入れています。課題協働型で実施しています。「ラーニングコモنزにおけるピアサポートの可能性を探る」と題して、5つの他大学図書館を訪問し、実際に図書館と学生協働している学生や担当の職員の方のお話を聞き、成果報告をラーニングコモنز板橋小委員会にて発表します。学生目線からのピアサポート提案に期待です。

ラーニングコモنزに行こう！

ラーニングコモنزは学びのたのしさ、新しいことの発見を共有する場です。

ラーニングコモنزを大いに活用してください！

鈴木 恵津子(すずき えつこ)

図書館

学修・教育開発センター

主催イベントについてのご報告

学修・教育開発センター（以下CRED）では、これまで様々なイベントを企画・開催し、その都度、皆様から貴重なご意見やご要望をいただいております。そこで、改めて今年度前期実施のイベントを振り返り、今後のイベントについて検討いたしましたので、報告させていただきます。

平成28年度前期イベントのまとめ

前期のイベントでは、昨年に比べ狭山キャンパスの学生、教職員の皆様に多数ご参加いただくことができました。これは、例年板橋キャンパスのみの開催となっていたイベントを狭山キャンパスでも開催もしくは中継したことが理由です。このことにより、大学としての一体感を感じるイベントにすることができました。両キャンパスでのイベント開催・中継にあたりご尽力いただいた関係各部署の皆様には深く御礼申し上げます。また同時に、一部のイベントについては中継が失敗に終わったこともあり、今後の課題の一つとなりました。

今年度実施済のCRED関連イベント

- ・5月21日 アクティブラーニング講座
「アクティブラーニングを取り入れた授業デザイン」
(ラーニングコモンズ運営委員会との共同企画)
- ・6月9日 e-kasei 講習会(入門編)
- ・6月30日 e-kasei 講習会(応用編)
- ・7月7日 e-kasei 講習会 ※狭山キャンパス開催
- ・7月14日 「大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ」
講演会 ※狭山キャンパス中継
- ・7月28日 e-kasei 講習会 ※狭山キャンパス開催
- ・7月28日 東京大学 FFP ミニレクチャイベント
※狭山キャンパス中継
- ・9月2日 教職員研究会
- ・9月8日 「アクティブラーニングを効果的に配置したカリキュラム設計」講演会

アンケート実施報告

今年度CREDでは来年度の活動へ向けて、過去のイベントへのご意見や今後のご要望をお聞きするアンケートを実施いたしました(実施期間:9月19日~10月10日)。合計82名(教員37名/職員45名)もの皆様にご回答の協力をいただき、貴重なご意見を伺えました。このアンケートに関し、以下2つの点から報告させていただきます。

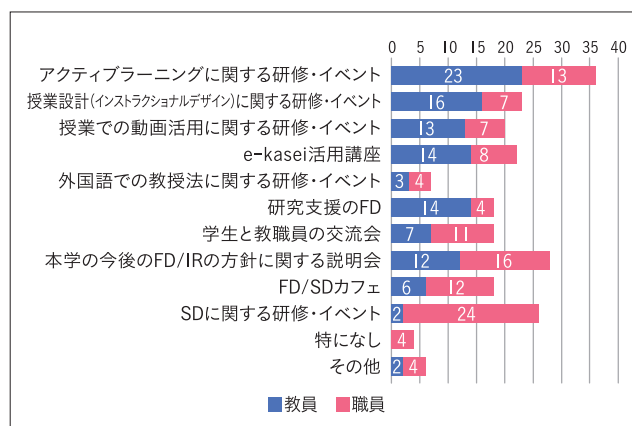
1. イベントへの不参加理由(自由記述/回答者数:25名)

「過去に学修・教育開発センター主催のイベント(教職員研究

会を除く)に参加されたことがありますか」という問いに対して「いいえ」の回答30名のうち、25名の方から不参加理由の記述をいただきました。イベントへの参加が難しい原因として、業務調整ができないもしくは広報不足とのお声を多数いただきました。今後、日程や場所の検討・広報方法の改善に取り組んでまいります。

2. 今後、参加を希望するイベント(複数選択/回答者数:82名)

今後参加を希望するイベントをお伺いしたところ、次のような結果となりました。



CREDがこれまで開催してきたイベント(e-kasei活用講座、学生と教職員の交流会等)への参加希望もいただきましたが、それ以上に新しいイベント(FD/IRの説明会、SD)への参加を望む回答が多かったことは、この間から得られた新たな発見です。最もご要望があったアクティブラーニングに関するイベントの実施はもちろんのことですが、こういった皆様からのご要望を後期~来年度のイベント内容に反映してまいります。

今後のCRED関連イベント(予定)

- ・2月1日 立教大学 BLP ワークショップ
- ・2月1日~3月31日 リサーチウィークス
- ・開催日未定 学生と教職員の交流会
- ・開催日未定 本学の今後のFD/IRの方針に関する説明会
- ・開催日未定 e-kasei 授業見学会&講習会

CREDは発足3年目を迎え、活動をより加速し充実したものにすべく日々業務に取り組んでおります。CREDの活動に対し、ご意見やご感想がございましたらぜひお気軽にお問い合わせくださいと幸いです。引き続きご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

(CRED 職員チーム/宮東城・安積和広・矢野穂)